

令和2年度 政経学部奨学論文

論題

ソポクレス『アンティゴネ』におけるイスメネの個人主義的傾向
ーヘーゲルの二項対立への批判ー

法律政治学科 4年 高落 弥生

要約

本稿では、ソポクレス『アンティゴネ』におけるイスメネの役割を研究した。これまで彼女の役割はジェンダー論と政治的観点から分析され、いずれの研究でも、彼女はアンティゴネの性格の苛烈さを強調するという付属的な役割があると理解されたり、古代ギリシアの女性観に合致する人物として登場していると分析されたりしてきた。彼女が女性観に合致する言動は消極的であることや、この役割のみではアリストテレスの提言する筋の統一が達成されないことから従来解釈では不十分である。

本稿は、彼女が生命を尊重し、唯一個人的な立場を取る役割を担っていると主張する。これにより、ヘーゲル的な神の法と人の法の対立の二項対立ではなく、イスメネを含む三項対立で分析することが可能になる。これは、ソポクレスの神論を理解する上で重要な要素だ。さらに、本劇がその後のギリシア的伝統の再考の流れや個人主義など後世の哲学の源流であると提唱する。